

人間を考える

2022年11月17日

校歌「空の翼」から見えること

趙 怡 教授

(比較文学、比較文化)

日本語の漢字は中国から伝わったものの、本来ほぼ一字一音だった文字の読みが、音読(漢音)と訓読(和音)に分かれる。しかも漢詩には漢音を、和歌・俳句には和音を多用する傾向も見られる。近代に至ると、カタカナによる外来語やローマ字といった西洋由来のものも入ってきた。世界広しとはいえ、これほど多くの異なる要素を一体にした言語は珍しい。

ではこのような視点から校歌「空の翼」を見てみよう。そこには和音と漢音の使い分けから、ひらがなとカタカナ、外来語、さらには英語(関西学院の校訓)に至るまで、上述したすべての要素が含まれている。そのうえ「いざ」という口語的な和音と、「関西」(クアンセイ)というきびきびとした漢音の交差による、極めて近代的なりフレインも登場する。しかも自由詩でありながら、伝統的な五七五の韻律もどこかで保っているのだ。この校歌こそ、まさしく和・洋・中の諸要素がうまく融合できた好例といえよう。

素晴らしい歌詞を作った北原白秋は、周知の通り近代日本の代表的な詩人である。作曲者の山田耕筰も、白秋の親友であり、著名な音楽家だった。一九三三年、二人による校

歌制作の経緯は、大学のホームページにあるので、是非ご覧いただきたい。そして戦時中には「輝く自由」や、「Mastery for Service」などの表現が時局にそぐわないとされ、校歌が公式に歌われることが控えられた時期があった、という歴史も忘れてはならない。

関西学院のOBだった山田耕筰はキリスト教と西洋音楽の影響を強く受けたが、北原白秋も早稲田大学英文科で学んでいた頃、フランス象徴詩に興味を持ち始めた。大正末期から昭和初期にかけて、二人のコンビによって数多くの童謡、唱歌、校歌が生み出された。校歌だけでも七〇曲以上があり、関西では同志社大学、大阪の豊中中学校、堂島小学校の校歌が含まれる。また日本国内だけでなく、中国の大連や上海にある日本人学校の校歌も二人の作品であった。

上海といえば、かつては「租界」を有する列強諸国の植民都市であり、日本人も数万人が、日本の中国「進出」と侵略に伴って上海に移住した。そこには西洋人居留民が作った交響楽団もあり、極東一と評されていた。山田耕筰はこの楽団とも関わっていた。戦時中、楽団が「日本音楽会」を開催し、山田耕筰の作品

を演奏し、作曲家本人がタクトを振った。開催自体は日本側の圧力によるものだったが、それとは関係なく山田の作品は現地の著名なフランス人評論家にも高く評価された。

このような歴史的な背景に基づいて、改めて校歌を見てみると、あの「和・洋・中の融和」の背後にはさまざまな物語が隠れており、そう簡単にできるものではないと思える。

今日の世界では残念ながら分断と排他的な行為が増えており、戦争も起きています。しかし皆さんの母国語も、素晴らしい校歌も、そして上海生まれのアメリカ人宣教師ランバスによって創設された関西学院も、すべて多様な異なる文化の融和によって生まれた結果だった。今後もし自らが分断や衝突、戦争に直面するようなことがあれば、ぜひ異文化の融和を謳うこの「空の翼」を思い出していただきたい。

『空の翼』

北原白秋作詞、山田耕筰作曲

1.

風に思う空の翼

輝く自由 Mastery for Service

清明ここに道あり我が丘

関西 関西 関西 関西学院

ボブラは羽ばたくいざ響け我等

風 光 力 若きは力ぞ

いざ いざ いざ 上ケ原ふるえ

いざ いざ いざ いざ上ケ原ふるえ